

早教育は花盛り

藤永 保

近頃、私のような人間のところまで、早教育問題についてのインタビュー、原稿依頼、テレビ出演などの申し込みがしきりにやってくる。察するに、早教育は再びまたび一種のブームを迎えているのであろう。

これには、無理からぬ事情もある。近年、大都市の中心部では、急激な再開発に伴って、従来型の地域社会が姿を消してしまったところが多くなっている。高層ビル群の立ち並ぶ都心のアパート団地では、小さな遊び場は設けられてもほとんど人影をみないことすら多い。

このような状況では、母親も幼児もともに人間関係を失ってしまう。幼児期とは、家族という血のつながりをもった——その点では最も親密な集団のな

かの、しかも両親を始めとする大人たちにより一方的に保護されてきたそれまでの人間関係を卒業して、同年輩の仲間という新しい人間関係へと、次第に重点が移っていく時期だといえる。幼児は新しく獲得した技能や体力などを、同等な仲間と競い始め、そのことがまた次の成長へのステップを作っていく。

一方、「お祖母ちゃんの知恵」を失った母親にしても、子育ては万事心細い。同じ境遇の仲間を求めるとはごく自然なことである。こうして、母子ともに仲間を求めるとしたら、その場はいわゆる早教育の教室や施設が最も手早いということになる。教育投資にはさして不自由しないほどの経済成長をとげた今の日本の実情では、早教育の場こそが失われ

た地域社会の役割を果たしているといったら皮肉にきこえるだろうか。

こうかいてくると、上のためにこそ幼稚園や保育所があるのではないかという反問があるだろう。まったくそのとおりである。しかし、幼稚園や保育所には、こうした大都市中産階級の幼児教育上のニーズに対応しきれない点がおそらく二つある。第一は、乳幼児の発達加速や早熟化の傾向である。それを一方的に早熟化といってよいかどうかには問題もあるが、ここでは詳述するゆとりがない。ともかく、元気に成長し要求する二歳児に昼間の限られた時間、充分な活動の場を与える適当な施設は今のところ見当たらない。最近では、二歳児どころか零歳児に英語を教える塾があるというのも驚きであるが、要するに、塾産業にあっても早期化の傾向はますます加速されていくであろうと予測できる。

もう一つは、いうまでもないが、高学歴取得と受

験競争に伴う早期からの知的教育の要望である。筆者は、学校教育を先取りするような技能教育を「知的教育」とは考えないし、そのような固定観念が日本の教育の現況を毒する最大の偏りだと考える者であるが、日本の社会全体の功利主義化の風潮とともに、「知的教育化」も止め難いことを痛感させられざるをえない。

おそらく、今後の早教育は二つの方向に分極化していくだろう。一つは、仲間を求める場としてのそれであり、スポーツ教室のようなものが典型となる。もう一つは、先取り知的教育であり、英語・算数・国語教室等々の花盛りは指摘するまでもない。しかし、何れにしても、その条件や根拠をよくよく見定めて適切な運営に力を注がなければ、空しい仇花に終わってしまうのではなからうか。自他ともに心したいものである。

(国際基督教大学)